

旭川文学資料友の会

友の会通信 第21号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
〒070-0004
旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
電話 0166-22-3334
印刷・株式会社あいわプリント

平成三十九年度

特定非営利活動法人

「旭川文学資料友の会」

総会を終えて

会長 菅野 浩

会員の皆様には、いつも一方ならぬお力添えにあずかり、誠にありがとうございます。

平成三十九年度通常総会は五月二十七日、文学資料館企画展示室において開催しました。

当日の会員は一七四名、出席者一九名、委任状一〇五名、計一二四名で総会は成立しました。

会長挨拶、来賓紹介挨拶の後、議長に三原一仁氏を選出し議事に入りました。

平成二十九年度事業報告。

「旭川文学資料館」

平成三十年三月末のデータベース入力済み件数六四五二一件、主な作家では、小熊秀雄四六二七件、三浦綾子一二三三件などです。

来館者数は、二二六二名で昨年度より二六〇名ほど多くなりました。

企画展は「旭川駅今昔物語」「北海道旭川

東高等学校文芸部俳句甲子園を駆ける」「第二十回旭川文学資料展」文人たちの墨蹟」生活資料雑貨展」を実施し、特に「北海道旭川東高等学校文芸部俳句甲子園を駆ける」では旭川東高文芸部の全国的な活躍が注目をあつめました。

自主企画。「第三十一回旭川詩人クラブ詩画展」「俳句結社『源流』五十周年記念俳句展」を実施し、「俳句結社『源流』展」は旭川における結社の活動の展示として今後大切にしていきたい企画でした。

情報提供事業では、シニア大学生が八月二十四日、資料館の見学に訪れました。

社会教育施設スタンプラリーでは十一月三日文化の日、二〇七名。冬まつり期間中は三二二名の来館者がありました。

「井上靖記念館」では「井上靖―愛蔵品展」

「井上靖、人と文学Ⅷ展」「色紙にみる井上靖の世界展」「収蔵品展」井上靖の足跡を辿る」。

特別展示「全国文学館協議会共同展示『文学館からのメッセージ』」等多彩な企画展示が好評でした。

関連事業「井上靖講座」を三回。普及事業「井上靖短編小説を読む」を四回。「生誕日記

念無料開館ミニコンサート。「生誕二一〇年記念文学講演会」を二回。などの事業を行いました。

「青少年エッセーコンクール」には、全国から中学生一八三作品、高校生一二一作品の応募がありました。授賞式は十二月十七日、井上靖記念館ラウンジで行いました。

平成二十九年度決算報告、会計監査報告については異義なく承認されました。

平成三十九年度事業計画では

「旭川文学資料館」では、「第二十一回旭川文学資料展」教科書のなかの文学者たち」「旭山動物園五〇周年展」「第三十二回旭川詩人クラブ詩画展」などを予定しています。

「井上靖記念館」では、「井上靖―愛蔵品展Ⅱ」「井上靖、人と文学Ⅷ」「風濤」の頃展」「井上靖と登山展」「海峡」展」等計画しています。平成三十九年度事業計画、予算案については

特に異議なく承認されました。

最後に平成三十九年度役員改選があり、理事として新たに三原一仁氏と上田郁子氏（井上靖記念館司書）を選任し承認されました。



「源流五十周年記念 俳句展」を終えて

俳句結社「源流」

五十周年記念俳句展について

源流主宰 石川 北辺子

このたび私達結社の俳句展が、旭川文学資料館ならびに旭川市教育委員会の共催をいただき開催できたことを嬉しく思っている。

源流俳句会は昭和四十三年三月旭川市の南端千代ヶ岡に誕生した俳句会である。学校長を退職した沢田潤生、榊原雪毬子に駅長を退職した氏家夕方の各氏が相寄って神楽俳句友の会を結成したのが会の始まりである。当時は月の例会を開くにも公的会場もなく、会員個人の家や市内の喫茶店、寺院などを借り受け例会は今まで一回の休みもなく続けられて来た。五十年間毎月の例会を継続したとなれば、今年で六百回の例会となる。良くぞ今迄続いてきたものと思う。

会員は旭川市を中心に三十名く五十名が在籍し、道内で発行されている有力な俳句雑誌や中央誌においても著しい成績を残しその中心的な役割をになつて活躍を続けている。

五十周年記念行事のメインを何に求めるか

についても苦悩がない訳ではなかった。俳句展にしても、先ず会場が問題であり、次に展示方法に課題があった。絵画等の展示会であれば視覚によつて大半の来場者を求めることが出来るかも知れないが、俳句の場合視覚のみに多くを期待することができない。俳句作家イコール来場者であることを念頭に置く必要がある、また俳句会の歴史が浅く、取り立てて人を引き付ける程の珍しい資料も無く、ただその他の工夫を求められるのみであった。

幸いだったのは旭川文学資料館ならびに旭川市教育委員会が共催者となつて会場の確保



や資料の活用を便利を図つてくれたことである。また道新をはじめ他のマスコミが力を貸してくれたことも幸いであった。今回力を与えてくださった来場者をはじめ、関係各位のご好意に報いるため今後一層の研鑽・努力を重ねてゆかなければならない。

俳句展の贈物

日下里 四

源流五十周年記念俳句展が旭川文学資料館で開催された。

会員二十二名の六十六句の短冊が、芽吹き始めた木々のように展示されている。そしてそれぞれの俳句の色を美しく見せ、会場に俳句の林を作っていた。

芽吹きの林の中に踏み入れる。

五十年の時が源流に流れたが、短冊や色紙に書かれた句は、詠んだ時の「現在」が会場に溢れていた。それぞれの句はいつの句かとはともかくその時の現在が息衝いている。この現在の重層が新鮮である。その時の自分と今向き合えるのも嬉しい。

俳句は日常のあらゆることを題材に詠む。

句の堆積からどの句が俳句展に姿を見せたのか。自然詠、境涯詠に関わらず、作者の喜怒哀楽も滲み出るのが俳句だが、六十六句に通底するのは、喜びと楽しさであった。俳句は読む人がいて成立する。読む人に哀しみを

せず、歡喜の句で林が色付いていた。

哀しみは自己に留め、詠み手と読み手が共に喜びあうとの願いが、句の選択の際に会員の胸にあつたのだろう。これは俳句展に導かれた効能であり、贈り物である。

句帳やノートに書かれた句と違い、短冊の句は、絵の要素をおのずと持つので、通常の読むという行為に、見る、眺めるが加わる。俳句は韻律であるから音楽性は当然持つが、そこに絵画性加わる。拙い自句も周りの短冊が作り出す風景に囲まれて別な味わいを持つように感じられた。これも俳句展の贈物である。

源流は、他の結社にも所属している会員も多く、一結社では「どこを切つても金太郎飴」的な句となる危うさが生じやすいが、多様な句を楽しめるのも、源流の魅了の一つである。源流から発した水が瀬となり淵となり海に出る。この様々な流れが結社原料を作っている。それぞれの句柄を信じつつも、枠から解放された目で俳句を楽しめるのも良い。結社の縛りを超えて「良い句は良い」と思えることを再認識できたのも今回の俳句展の贈物と言える。

この俳句展を企画された源流事務局に、たくさんの贈物を戴いたことに感謝したい。

(俳句集団「瑞木」主宰、石狩市在住)

源流五十周年記念俳句展に思う

鈴木 千鶴子

今回旭川文学資料館に於いて三月十三日より四月二十一日まで、源流五十周年記念俳句展を開催致しました。文学資料館の御配慮で、企画の広告宣伝等スムーズに進み、色紙短冊百枚以上の展示雑務等、和気藹々漕ぎつきました。

三月十四日道新朝刊に源流俳句会五十周年の歩みと俳句活動の内容、抱負等掲載されま



した。源流の一員として誇りに思っています。

当結社の故人、氏家夕方氏、榊原雪穂子氏、澤田潤生氏、梅沢勇氏、四名と現在の石川北辺子主宰と共に二十一名の力作揃いの展示に充実感を味わった次第です。

いろいろと相乗効果のためもので来場者は三百人余り、俳句関係の方々も沢山来られまして感謝致して居ります。俳句展示の緊張感が大変勉強になって居ります。

昨年の十二月二十六日から今年の二月二十八日まで、旭川文学資料館主催の生活資料雑貨展に共催として源流俳句会参加も大変有意義でありました。

今回の源流五十周年記念俳句展に共催されました旭川文学資料館・旭川市教育委員会に對しまして感謝申し上げます。

又の機会があります事、結社のひとりとして期待しております。(源流俳句会会員)

俳句に興味はありませんか。

旭川に俳句を楽しむ句会があります。

「源流」句会です。

毎月第三土曜日が句会です。

神楽岡地区センターで

午後12時30分から句会をしています。

一度体験してみてください。

連絡先は 0166-66-0357

十河そらです。

開催中の企画展

第二十一回旭川文学資料展

「教科書の中の文学者たち

—国語教科書を中心に—」

について

(六月十二日～九月一日)

沓澤章俊

第二十一回目となる旭川文学資料展。毎回、旭川ゆかりの文学者に焦点をあて展示紹介してきましたが、今回は、教科書の中で出会う文学者二十数名を、ここ旭川との関係も含めて紹介しています。

また、江戸期の寺小屋で使われていた書物も含め、一八七二(明治五)年、「学制」が公布され近代教育制度がスタートしてからの教科書の変遷をたどる展示ともなっています。

学制発布当初は自由発行、自由採択で、教科書としてのスタイルも決まっておらず、国語だけではなく、地理、修身、物理などの内容も交えた欧米の教科書を翻訳したものが多く使用されました。有名なのは、アメリカのウィルソン・リーダーからの翻訳の『小學讀本 卷一〜四』です。卷一の初めの「凡(および)世界に、住居する人に、五種あり、…」の巻頭の一文は「酒屋や魚屋の小僧までがそ



れをさええずった」とも言われるくらい普及しました。

その後は、国への「届出」「許可」が必要になり、一八八六(明治十九)年からは、国の「検定制度」が施行されることとなります。

今回は、終戦直後の墨塗り教科書も展示しております。また、昨年使用された教科書を自由に閲覧できるコーナーも設けています。国語以外の教科書コーナーや、懐かしい文房具のコーナーもあります。

資料の展示や展示パネル作成につきまして、友の会展示委員の皆様はじめ、友の会会

員で生活資料収集家の百井昌男さん、北海道教育大学附属図書館、旭川市図書館、三浦綾子記念文学館各館の御協力をえて、完成することができました。ありがとうございます。

八月十八日には、午後一時三十分から企画展示室にて、宮澤賢治作品の朗読とオカリナ演奏があります。朗読者は塩尻曜子さん、演奏者は竹本朱美恵さんです。

観覧料、参加料は無料となっておりますので、皆様、是非お越しください。



これからの企画展

第三十二回

旭川詩人クラブ詩画展

(十月二日〜十一月二十二日)

詩画展について

立岩 恵子

当結社が結成されたのは一九七七年で、その年に第一回詩画展が市民文化会館で開催されました。翌年に第二回、次の年に第三回と続き、その当時の私にとっては雲の上の人達と思える詩人達の、情熱迸る企画・作品に圧倒された事を思い出します。その後時々休みながらも、一九九三年の第七回からは休む事なく今日に至っています。

ところが近年、旭川はどうして詩画展なの”と不思議がられる事が多々あり、あらためて道内を見渡してみると他に類は無く、ずっと以前からパフォーマンス豊かな朗読会が花形です。何故でしょう。旭川！

私の場合、画は得意でなく、詩画の画に魅かれて来られた方には申し訳ないのですが、それなりに味わいを出そうと四苦八苦するの

も楽しく好きですし、各人各様の趣向を目にするのも楽しみです。

そして何よりなのは、開期中、ご都合の良い日にお好きなだけ見ていただけるという特典です。

その時、こ とばに彩りを添えることでより深く伝わるもの、よりひろがるものがあると信じています。そして本当は、その詩画をあいだにして見知らぬ人とも語り合いたい！と思うのです。

十一月六日(火)午後一時半より

私達の月例会「詩と遊ぼう」を公開講座とし詩画展会場に於いて開催します。

前半は各々が、展示してある自分の作品について思い入れなどを語ります。後半は即興詩ですが、作詩十五分とコピー時間少々、その間はティータイムとなりますので、作品についてご感想などいかがえたら嬉しいですし、即興詩の参加は自由ですので、ぜひどうぞ！フィナーレは朗読発表です。

詩画展をご縁に詩の輪が広がることを希っています。



昨年の詩画展から



道教育大旭川校 村田 裕和 准教授とゼミの学生 5月12日



第一展示室のソファのコーナー ゆっくり読書ができます

有島武郎と『松むし』

片山 礼子

有島武郎の生涯は四十五年間と短い。十八歳の時に北海道の大自然と雄大さに魅了され、その後、母校の札幌農学校を辞するまで札幌での生活が始まる。

留学期を経て、武郎が三十一歳の時、神尾光臣の次女、安子と結婚をする。

武郎は、『松むし』のはしがきの中で、

このさゝやかなる集は故人が病苦の間に書き残したる断簡の殆んど凡てにして、録する所悉く私事に亘り人に示すべきものにあらざるに似たれど美醜共に蔽はず敢て上梓したり

と記している。

『松むし』は、安子夫人が大正三年に発病し、一年七カ月に及ぶ闘病生活の中で書き記した病床雑記である。その闘病中に書き記したものを、安子の死後、有島武郎が編集したものである。

『松むし』の内容について、ふれてみると、病床期にある妻、当時の安子の心の吐露が随所に表現されている。武郎と安子との間には三人の息子達。いずれも当時は一歳から三歳

と、幼い子ども達である。そのことは、安子にとつても心が痛む気がかりなことであつただろう。いくつか、そんな心境を詠みあげた短歌を紹介する。

白百合に似たる子なれば、その胸に露や置くらむ母やみてより

ほゝゑみと涙の外に言葉なきちさき心の母戀ふるかも

神かけて、子等思はじと病むわれの誓ひし日より世は變り見ゆ

このように、子どもを思う安子の心境を詠んだ短歌が目につく。

発病した年の九月頃から安子の健康はすぐれなかつた。翌年の一月には、北海道の地を離れ、神奈川、鎌倉の地で療養生活を送るこ

とになる。この頃、武郎は、母校、札幌農学校で英語の教師として、教壇に立ち、北海道と鎌倉の地を行き来する。一方、安子は、一時は快方に向かったように見えた安子の様態であつたが、結果的に、武郎は職場を離れる決意をする。有島武郎にとつて大きな転換期を迎える時期である。

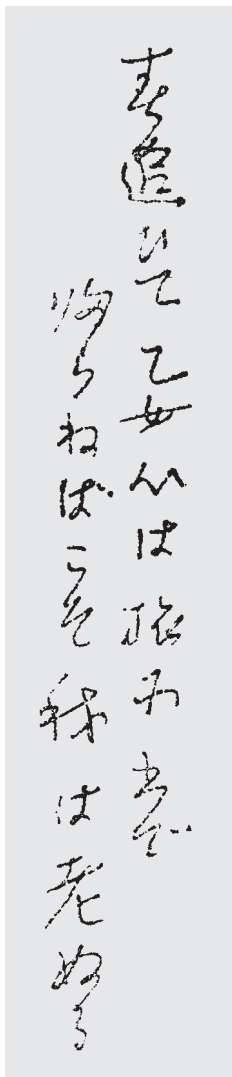
安子の死後、大正五年九月、武郎の編集で、限定四百部が出版される。ちなみに蔵書している原本は、第二百十七冊で、安子が武郎に宛てた書簡の二枚目が付記されている。(図1) また、この書簡で、

春追いて乙女心は旅に出で帰らねばこそわれは老ぬる

の短歌が添えられている。

安子が亡くなる十ヶ月前のことである。

(図1)



エッセイ

本屋通いがやめられなくて

永江 朗

毎週月曜日の朝、HBCラジオで本の紹介をしている。「ナルミッツ!!!」という番組内の「永江朗 New Book World」というコーナーで、九時十五分から十五分間ほど。前の週の水曜日ごろまでに取り上げる本を決めて、プロデューサーに伝える。

どんな本を取り上げるかを考える場所はたいてい本屋さんの中。平積みされた新刊書や棚に並ぶ背表紙を見たり、棚と棚の間を歩きながら考える時間が好きだ。

プロデューサーからは「自由に選んでください」といわれている。でも、わたしなりに注意していることがある。ジャンルが偏らないこと。同じ出版社の本が続かないこと。ときどき新書や文庫も入れること。そして、できるだけ北海道にゆかりある作家や作品を選ぶこと。もちろん、毎回というわけにはいかないけれども。

本屋の店頭で考えるのは、若いときからの習慣だ。高校生のころ、学校の帰りは必ず本屋に寄っていた。校門を出て六条通りを西へ、買物公園を北へ。まず富貴堂を覗き、マ

ルカツのブックス平和で長い時間をすごす。一時期、買物公園三条の東側にもブックス平和があったはず。西武百貨店がオープンした高校二年生の秋からは、この巡回ルートに三省堂書店が加わった。

アメリカのスラングを集めた辞書を開いて笑ったり(下ネタ満載)、美しい山岳写真集にうっとりしたり。しかし、小遣いのとぼしい高校生が日参するのは文庫の棚だった。資料を見ると、わたしが中高生だった一九七〇年代の前半からなかばにかけて、新しい文庫が次々と創刊された。七十一年に講談社文庫、七十三年に中公文庫、七十四年に文春文庫、七十六年にコバルト文庫と講談社学術文庫が誕生。大学進学のために旭川を離れた七十七年には集英社文庫と朝日文庫が創刊された。

そうした本屋通いの中で出会った一冊が畑正憲の『天然記念物の動物たち』(角川文庫)だった。なかでも最終章の「大雪山に生きるもの」には強く心を動かされた。畑のエッセイを片っ端から読むうちに大江健三郎を読むようになり(畑が小説家になることをあきらめたのは、大江の才能に打ちのめされたからだ)、大江が影響を受けたというサルトルに関心を持つようになった。大学で哲学を専攻することにしたのはこのためだ。いま哲学についてのエッセイを書いていて、夏秋頃には晶文社から刊行されるが、ルーツは高校生のころの本屋通いにあった。旭川の書店事情は激変した。私が通った三

条の富貴堂もマルカツのブックス平和もない。三省堂書店は西武百貨店ごとなくなってしまった。もっとも、本屋がなくなってしまうたわけではなく、丸井跡のジュンク堂書店や宮前のコーチャンフォーをはじめ新しい本屋が市内のあちこちに開店している。いまの高校生は、学校の帰り、どの本屋で立ち読みしているのだろう。

永江 朗(著作業)

昭和33年(1958)永山町(現 旭川市永山)生。

旭川東高等学校卒。法政大学文部哲学科卒業。

90〜93年、雑誌「宝島」「別冊宝島」編集部。

08年、早稲田大学文学学術院客員教授。

09年〜13年、早稲田大学文学学術院教授。日本文藝家協会理事。

主な著書『批評の事情』『本を読むということ』『広辞苑の中の掘り出し日本語』『これから本の授業をはじめます』『51歳からの読書術』ほか。監修に『日本の歴史をつくった本』。



東校出身の堀下 翔君(右から2人目)と東高の文芸部 3月29日

作品鈔

短歌

桑原 憂太郎

同調の圧力かかる教室で生き抜くために

みんなでジャンプ

先生と話したいとは思はない

生徒に言はれし逢魔が時に

研究屋生徒指導屋特活屋

プライドありて屹立のせり

学校を出て十字路を折れてから

男子と女子は並んで歩く

ざけんなど叫んで去った

女生徒のつくる塑像の優しい瞳

(歌集「ドント・ルック・バック」より)

斉藤 純子

迷ひ道かかへてまづは空騒ぎ

人ら遊ぶひまはり迷路に

そのことにもう触れないで

割れさうな桔梗の蕾かすかに揺れる

はしやぐのを止めたひまはり
太陽に睫毛を伏せて夏を見送る
公孫樹の葉むずむず動く心配して
子の変声期思ふ九月は
「かうやつて吹つ切るんだよ」
鈍色の低き雲より雪は降りくる

五行歌

キャンパス 色は

まだ一色

これから先

七色にする為に

歩み出す

風に乗り

蒼空そらに漂う

シャボン玉

ぼくとママが

映つてる

テレビで満喫

名所に温泉

グルメ旅

行ったつもり

食べたつもり

上西 亜美

三品 潤一

笠井 武彰

豪邸の庭
見事な
山水
木も花も
自由はない

川柳

川柳あさひ七月号より

政治家の記憶と記録せめぎ合い
官僚のはずれたたがに言葉なし
哀悼のY M C A星となる
いさぎよい選手コーチは自己保身
スマホ手に孤独な心まぎらわせ
あさつぴーも一役買って詐欺退治
シヨツピング半値飛びつく空財布
年金は遣らぬ働け八十路まで
鮮明に着物の柄まで亡母の夢
菜の花の真つ黄飛び込み目にまぶし
虚言症政界を出て世をおおい

あきあじ・第二十二回黙朗忌長寿祝賀大会

非核化を冗談だったと言わせない
冗談が通じなかった妻の乱

堤 静波

栄子

ひろ子

則子

静枝

ケイ子

敦子

重子

博一

由利子

和子

勝博

富子

昭志登

悼・井手都子さん

加川 憲一

都子さんが突然病に倒れ入院、手術を受けたのは平成二十五年十月のことでした。その数日前の月例会(群の会)に出席していただけに、大変ショックでした。それから三年半余り、妹の由紀さんや、身内の方々の手厚い介護もあつて、見舞に行くと笑顔で迎え、帰りには握手をしたり、手を振ってくれることもありました。それだけにこの五月十一日の訃報には言葉もありませんでした。

都子さんとの出会いは、昭和三十年代中頃市内の句会だと思えます。当時は都子さんは、眩しい程の感性の豊かさと冴え、そして表現の大胆さ潔さで周囲の者を驚かせていました。句集の題名となった次の句、「劇場の椅子八十五パーセントは脳死」は、賛否いずれにしても話題になった作でした。

都子さんの私生活の部分では、発病後に知ったことも沢山ありました。

都子さんは十勝の本別町に生まれ、高校卒業後、地方公務員(北海道)として停年まで勤められました。俳句をはじめから句会や諸行事に積極的に参加、後年には現代俳句協会幹事(主に会計担当)として信頼をあつめ、俳句への深い思いと意志を秘めながら、

気配りとやさしさで周囲の者を和ませる人でもありました。

「群の会」も都子さんの発案、命名によるものです。

それにしても、病に倒れてから亡くなるまでの間、俳句人生と言つてよい程執着していた俳句との絆を断たれた無念の想い。他者には決して推し量ることは出来ないことですが、発語も文字の読み書きも出来ないというジレンマ(?)——その内心の想いを、時に見せた都子さんの涙の後ろに見たように感じたことも幾度かありました。

もし来世があるとしたら、都子さんはきつと俳句との縁を取り戻し、この世で成し得なかつた新しい俳句の扉を開いて進んで行くことでしょう。

かもめよこぎつて雪暗のオルガン 都子

井手都子作品抄

鶴を数えるとてもやわらかな洗濯

劇場の椅子八十五パーセントは脳死

鶴渡るまだあたたかい遺体の上

紅葉これから体操をして追いかける

満月はすすいすい馬を輸送する

首も足もすわる嬰兒よ青十勝

みみずくや図書館紙の音つもる
火星まで春の水買いにいけます
神無月紙の息づかいばかりです
初夏の黄河という名の赤ん坊

(加川憲一・抄出)

〔海程〕二十九年十月号より転載



井出都子句集「劇場の椅子」

平成三十年代	役員体制	顧問	相川 正志	井内 治弥	北見 弟花	木原 直彦	菅沼和歌子	東郷 明子	富田 正一	菅野 浩	石山 宗晏	十河 宣洋	旭川文学資料館館長	東 延江
	井上靖記念館館長	荒川 美智	西勝 洋一	片山 晴夫	上田 郁子	坂井 京子	白井恵理子	立岩 恵子	水下一 壽代	三原 一仁	森内 傳	阿部 清	石川千賀男	

資料館だより

展示室の照明が新しくなりました

展示室の照明が暗く、資料が見えにくいところがあったりしていました。

昨年、展示室の照明の為にと高額の寄付がありました。十二月から工事を始めて、一月末頃完成しました。

新しい照明で資料等が更に見やすくなりました。この機会にぜひ一度資料館に足を運んでみてください。



会員加入のご案内

旭川文学資料友の会では、会員の募集を行っております。

日頃文学などに興味を持ちながら、なかなか思いきれず躊躇されている方、一步を踏み出せない方々のお申込みを、お待ちしております。この会は旭川の文学の愛好家の有志が集い、平成十三年四月に設立されました。

年会費 二〇〇〇円
総会の出席ができます。
会報をお届けします。

展示室ボランティアのお願い

文学館では展示室の当番をボランティアにお願いしています。

ボランティア活動を通して文学に触れることができますので、是非ご参加いただければと思っております。

場所 旭川文学資料館 展示室
時間 十時〜十六時(昼食休憩一時間)
交通費 一〇〇〇円

受贈資料

(二〇一七・十一〜二〇一八・五)

- ・ 本田 初美 詩集『芭露小景』
- ・ 網谷 厚子 エッセイ集『陽をあびて歩く』
- ・ 岡和田 晃 藤元登四郎『物語る脳』の世界、林美脉子詩集『夕エ・恩寵の道行』他
- ・ 春見 朔子 『そいう生き物』、『すばる』(二〇一七・十、きみはコラージュ) 収載
- ・ 中村 洋一 歌誌『香蘭』、『新墾』、『原始林』他
- ・ 入谷 諭司 『山と溪谷』他
- ・ 高澤 光雄 『深田久弥と北海道の山』、『山旅句』
- ・ ひびかいち 『あまやどり果まいご村』
- ・ 塩田 惇 文集『正和小』、『千代田小』、『明星中』、『旭川南』
- ・ 黒田 忠 『大雪山自然解説マニユアル』
- ・ 西勝 洋一 蜷子稔編『青い麦』十五冊
- ・ 石川 郁夫 『佐藤喜一』記録への傾斜・内的表白の封印
- ・ 矢崎 節夫 教科書「ひろがる言葉 小学国語5下」
- ・ 田中 亮太 直筆原稿 詩『#Me Too』二枚
- ・ 菅野 浩 小檜山博『夢の女』他九冊、郷土誌『あさひかわ』、『タウン誌』、『ほうずき』(ダンボール箱五箱)
- ・ 坂井 京子 檜垣桂子句集『白玉』

その他、横山いさを、前田恵、十河宣洋、東延江、各地文学館、記念館館報、各地市民文芸、文芸同人誌、句誌、歌誌、詩誌等たくさんの方の寄贈を受けました。心よりお礼申し上げます。

友の会人事動向

阿部英昭事務局長が三月三十一日付で定年退職されました。後任は澤向英知さんが四月一日付で赴任されました。

【新入会員】

(平成二十九年度以降) 二十一名
近藤初美、桑原憂太郎、小林ろば、佐藤芳英、篠永みゆき、西村勝世、石川北辺子、河野秀子、葛西知子、水野幸雄、佐々木宏、佐藤博己、日下敏、清水恵美子、野上好、塩尻曜子、真鍋嘉男、清水敏一、東みつよ、橋本喜夫、太田瀬尾音子

【退会者】

一〇名
【現在会員数】 一七七名

編集後記

天候がはつきりしない六月でしたが、夏までも過ぎて常磐公園も散策する人が増えました。ベンチに座って楽しそうに話をしてる人、ペット連れの人など様々です。こういった方々をぜひ文学資料館に誘いたいと思うのですが、なかなか難しいようです。

それでも、教科書展などは、自分達が使った教科書に出合っ、懐かしいと声を上げる方も沢山います。

俳句展はテレビのプレバトの影響でしょうか、多くの人が、俳句は初めてですがなどと言いつつ、興味深く鑑賞してくれました。(宣洋)